

## 新刊紹介

Über die vom Sterbefasten handelnden

älteren Paima des Jaina-Kanons.

von Kurt von Kamptz. 1929, Hamburg.

苦行は耆那教の修道中の最も重要な一である。而してその苦行は斷食(anasarā)と、それに續く賢者としての死(pañḍiya-【pañḍiya-jmarāṇa】)とである。本書は此の斷食法と死去法とを主として取扱ふ所の耆那教古聖典の一群「雜集」(Paima, Sū. Prakṛna)に關する種々なる問題かを考察してゐる。

内容は六章よりなる。第一章には「雜集」といふ一群に攝めらるゝ經典の移動を調べ、普通に十經とある以外に、或は二十經・七經・九經・十三經・十六經等と數へられ一定しないことを示し、第二章には資料としての出版書及び寫本の名稱を掲げる。第三章に來つてこれら諸經典の編者。傳承中の混亂、從つて彼等相互間の異同の場所等の形式的研究をなしてゐる。第四章に於いては内容的研究に向ひ、先づ三種の死——即ち愚死・愚賢死・賢死の三種ありて、第一は耆那の教を知らぬ人の死、第二は耆那教の在家信者の死、第三は耆那教の苦行斷食者の自由意志的な死を意味することを述べ、次に死時の床の造り方、心の持ち方等に及び、又斷食法には終生の間のものと、死へ導くも

のこの二種があり、斷食の日數が極めて形式的に數量的に規定されてゐる。かゝる斷食法は既に第八・第九アング中に見出されるが、「雜集」中のもの方が一層簡單であり、從つて古きことを示してゐる。第五章にはかゝる斷食法・死法に敬虔なりし信仰あつき人々の實例の物語を拔出して掲げ、それらは人物名によつてデーヴ・ナーガリー順に配列されてゐる。第六章には rāhāṇā (誠實)とその階段・報酬等に關して述べられる。

小冊子ではあるが此の方面の研究は極めて稀であり且人目につきがたいから敢て紹介することをした。(龍山)

Sur les Traces du Bouddha

par René Grousset, 1929, Paris.

著者ルネ・グルッセ氏はギメ博物館の Conservateur-Adjoint であり、最近『Histoire d'Extrême-orient』なる二冊より成る大著を爲せし人である。

本書は序文によれば、支那に於いては大唐時代、印度に於いては戒日王時代、即ち西紀第七八世紀の頃「此の高き文化の時代、それを今日に再現せしめやうと欲して」、當時の玄奘及び義淨等の求法僧が、ゴビの沙漠を涉りパミールの險を越え、或は南海の岸に沿つて、旅行した跡をたづね、又佛教藝術の華咲ける姿を髣髴せしめやうとの企圖によつて、讀み易き形に於いて書き述べられたものである。しかも東洋學の最も尖端的な考古學的、歴史的研究の成果も十分咀嚼された上で取入れられてゐる。

此の點專門的にも存在價值が認められる。

内容は十九章より成る。第一章、「史詩の支那」には大唐の繁榮とその柔弱なる反面の状態及び西域の狀勢を述ぶ。第二章、「佛教の呼聲」玄奘の出づるまでの支那の佛教、玄奘の出發迄の經過を述ぶ。第三章「西關を横ぎりて」は玄奘がひそかに國を脱して高昌に至るまでを、第四章、「エビの底に沈みし波斯の壁畫」高昌より焉耆龜茲に至る經路を、それらの地方の種々なる發掘品・壁畫等に就いて所謂西域の文化の跡をたづね、第五章「遊牧民の移動に従ひて」は龜茲を出でて遊牧民の隊商に従つて西方へ進みサマルカンドに至り、鐵門を過ぐる迄を述べ、第六章、「ガンダーラ佛教の國」に至つてその地方の諸國の狀勢を所謂希臘佛教的藝術に就いて詳細に語つてゐる。第七章、「ガンガの聖地に向ひて」、いよ／＼印度本土に入りてより、カシユミール・マツラ地方の諸國を巡歴し、第八章、「佛陀の聖地」に入りて舍衛城、カピラヴスツ、クシナガラ更にマガダ國の王舍城佛陀伽耶等を歴訪する。第九章は「デツカンへの旅、アツヤンタ寺」の記述をなし、第十章は「ナーランガ道院」を、第十一章は「詩人王、ハルシヤ」即戒日王を、物語つてゐる。第十二章は玄奘の歸路、「パミールから燉煌へ」の道程を記し、干闥の歴史を物語る。第十三章、「唐の榮譽」は大唐の文化とその四方の諸國への影響を述べる。更に第十四章は「南海の巡禮者」と題して義淨の南海寄歸傳の記事を傳へ、第十五章「義淨の航海」も同じく南海諸島の狀勢を描く。第十六章、「塔の國にて」は佛塔並び

立つ印度への憧憬の詩を譯す。第十七章は「大乘の形而上學的飛躍」と題して中觀瑜伽兩派の發展を可なり詳細に序述し、第十八章は「佛教の不可思議なる天國」と題して佛果の廣大なる作用を表現せる詩歌を傳へ、第十九章、「印度の美術の發現」は大乘佛教の精神を表現せる印度支那日本等の藝術作品に就いて述べてゐる。

尚本書は大谷大學の山口益氏にテイケートされてゐる。

(龍山)

## 古代日本人の世界觀

城戸幡太郎著

本書は主として古事記を考古心理學的に研究したもので、言語と神話との關係から古代日本人の世界觀を考察したものであつて、著者が目下研究して居る國語の心理學的研究の一部分を爲すものである。

著者は云ふ。日本の神話は國語によつて表現されて居るのであるから、これを解釋するには國語の構造を理解しなければ成らぬことは云ふまでもないことである、而して言語の構造には民族によつて特殊性がある。故に一民族に於ける言語的表現の形式を以つて他の民族のそれを律する事は出来ない。本居宣長の古事記解釋に於ける古言訓讀の方法には尊敬すべきものがある。しかし彼の語原解釋の方法が主として音便及び延約の原理によつたことは、日本語の正しき理解の方法であるといふより

も、寧ろ支那語の反切を模倣した方法であつた爲、その結果に於いて多くの誤謬を犯したのであつた。國語のうちには延約の原理によつてその語原を説明しうるものはあるであらうが、單にそれだけでは不十分である様に思はれる。自分は語源解釋に於て更に三つの心理學的原則を認める事が出来ると思ふ。即ち(一)國語の融通性。(二)國語の活用性。(三)國語の類化性これである。融通性とは、例へば「橋」には石橋、鐵橋、懸橋、浮橋、吊橋等形態は種々であるが、何れも橋であり、其等に一定の共通性が認められれば成らぬ。更に「はし」は橋、端、階、嘴、箸、柱(ら)、解(け)に融通し、物と物との「はしわたし」をする限り、これらは皆同じ意味である。此の如き點は日本神話の解釋と共に明にせらる可き問題であつて、かゝる日本語の表現によつて日本人の概念構成の方法は支那入や歐洲人とは趣を異にしてゐることを明にせれば成らぬ。第二の活用性とは、國語に於いては體言に用言の終止形を表はす語を添加して用言を成立せしめる。而して終止形は凡て「う」列で終る。その中「つ」「ぬ」で終る語は極めて少數であり、「ゆ」「ふ」「は」「う」に通じ、「む」「は」「ぶ」「ぶ」も通ずるから、大體用言の終止形は「う」「む」「く」「す」「る」を以つて主要な表現と考へる事が出来る。而して「う」は Können の意味を、「へ」は Kommen の意味を、「た」は Tun の意味を、「に」は Sein の意味を表現するものではないかと思へられる。恐らく日本語の用言はその原始形態として體言に「う」「く」「す」「る」の如き語を添加することによつて意欲の實現及び存在を表現したものが多かつたのではないかと思はれる。ヘル

バルト流の聯想心理學に基く言語學者は、此の様な意味の變化を類比によつて説明するが、日本語に於ける意味の變化は單なる類比に依つては説明出来ない。第三の類化性とは、同音の語が融通性に於けるが如く、本質的に共通の意味を表現してゐるのではなく、寧ろ偶然的に同一或は類似の音を有する他の詞と類化して、その詞の本來の意味が多義性を表現するやうになる事である。「つきよみ」が月夜見とも月讀とも月弓とも書かれるのは其例である。かゝる類化性は國語が歴史的社會的現實性を失ふやうになると、その解釋として意味の附會から生ずる場合が多い。而して此は國語の融通性に起因するものかと思ふ。著者は古語の解釋に對して右の如き方法を用ひて、次の如き問題を論考してゐる。「古代日本人の産靈信仰と言靈信仰」(一)神と命、(二)事と言「古代日本人の唯物史觀」(一)世界神話、(二)生活神話。「海原神話と暴風神話」(一)海と生産、(二)浮と請合、(三)船と産業、(四)風と解放、(五)火と發生)。「黃泉神話と禊祓神話」(一)死と殺—人生觀、(二)穢と禊—道德觀。「高天原神話と太陽神話」(一)天と主宰、(二)珠と統御、(三)井と誓約)。「農業神話と産業神話」(一)太陽と生産、(二)女神と媾和、(三)祭禮と經濟、(四)顯齋と政治、(五)奉齋と勞動)。以上、外に神名索引「及び」古語索引」。本書に取扱はれた問題は甚だ新しからぬものである。然しその取扱の方法は嘗つて試みられなかつた全く新しいものであつて、その大膽自由な研究は、我が古代史の上に、小さからぬ光を投げかけるものである。(四六版約三百頁。壹圓八拾錢。岩波書店刊)(多)

# 古文書學概論

勝 峯 月 溪 著

著者勝峯文學士は京大史學科を出でて續引き同大學大學院にあり、後、本學に古文書學を講ぜられた篤學の士である。

今回其遺稿が著者の恩師西田博士の校閲と、同窓徳重教授の補修を経て西田博士の題簽、三浦、西田博兩士の序文を載せ、堂々菊版千頁の大冊となつて出版せられた。

方今、史學の研究と其著書及び史料の刊行の隆盛は前古に比を見ない華々しさを呈して、學界近來の偉觀を現出しつゝあるにか、はらず、其補助學として史料の大部分を提供する古文書に關する單行本を、古く久米博士の古文書講義に見るのみにて以後他に終に見出し得なかつたのは奇異事とされてゐる事である。此際に本書の出現は誠に意味があると言はればならぬ。

本書は元來著者が本學に斯學を講ぜし講案に基づき、その後之が増補完成に年を重ねて成就されたのであるが其の企圖する所は古文書の整理、讀解、鑑定等主として古文書研究の手引たらしめんとするものであつたけれども、尙前記の如き、此種の著作の殆ど見られない事情にかんがみ、學界近來に於ける古文書研究の知識の總量をも收拾せんとしたものである。

先づ序論を三章に分ち、第一章を古文書學の概念とし西洋及び我國に於ける古文書學の定義、及び其の對象をのべ、更に古文書の種類に言及して雜多極らない我國古文書群の分類を試み

てゐるのである。この分類體系に依つて本書の根幹たる後篇古文書各説は述べられてゐるのであつて、先づ我國の古文書を國內文書と國際文書とに二大別し、國內文書を(一)公文書、(二)準公文書、(三)私文書に分ち、(一)公文書を二分して朝廷文書と武家文書とし、更に朝廷文書を内文書、院文書、皇族文書、官文書にわかれ、官文書を又内官文書、外官文書、令外官文書に三分する、而して武家文書を鎌倉幕府開創より、室町幕府滅亡迄を武家時代前期とし以下安土桃山時代より江戸時代に亘る期間を同後期として、この二に系統づけんとするのである、次に(二)準公文書は公卿文書、社寺文書、庄官文書より成り、(三)私文書は對公及準公文書、對私文書、對神佛文書の三より成立せしめる、國際文書は東洋諸國關係と西洋諸國關係とに二大別し、前者に時期を、上古、中世、近世、と分ち、各々を支那、朝鮮、其他、の三方面に分類し、西洋諸國關係のものは中世末期、近世前期、及後期の三期に分つて統一せんとするものである。

元來紛雜極りなき古文書の全部を網羅し、其に整然たる分類を與へて各々への配列を試みるさいふ事は頗る困難な事であつて、分類命名の比較的容易な公文書に於てならばまだしも、個々獨立、あらゆるものを包括する私文書の如きにあつては殆ど不可能に近いものと言はればならぬ、此點幾分如上の分類に従つて妥當を缺くものゝあるを否み得ないが、完成さるべき古文書分類法の第一の試みとして認容さるべきものであらう、最後に古文書學の價値につき一言して此章を終る、第二章は西洋と東洋殊に我國に於ける古文書學發達の歴史を述べ第三章は古文

書學研究上の諸注意を興ふるものである。以上にて序論を終へて本論に入り、本論は前後兩篇に分たれる。前篇外的研究に於て六章を分ち、第一章にて古文書の材料としての紙と墨、製作の器具としての筆と硯等々支那以來の變遷を概觀し、第二章古文書の形狀の條にては紙及び木材を材料とした場合の種々なる形狀を詳説し、第三章にて古文書の書體につき支那及び日本の沿革を述べ、殊に我國に於ける新字及び譌體文字の製作方法として合字法、減劃法、轉換法並用法、音符の代用、意義符號の代用等を挙げ、更にこれに關聯する國訓、借字、誤用等を説明してゐるが以上各項の下には豊富に其例字が集められてゐるのである。章尾には我國古文書に現れる異字の主なるものを採録した異字一覽、及び片假名一覽を附して參考に便ならしめる。第四章にては支那より我國に下る書風の變遷、書道史を略述し、續いて第五章に花押の起原、意義、變遷、及び其の選び方等を圖示して説き、第六章では印章につき十數項目に亘つて解説を試み、天阜御璽以下二十數個の印章の圖版を附してゐる、後篇内的研究は五章に分ち、第一章は言語及び文體を題し、第二章は様式總説として、(一)古文書の本文、(二)差出人と受取人、(三)日付、(四)追書、袖書奥書、裏書、其他、(五)様式變遷の概觀の五節に分ち、第二節に書留め、上所、敬語、脇付け及び署名、宛名等は極端に草書せられて殆んど符號化する場合多きに依り代表的なもの、圖版十六葉を附し、第三節にも亦干支及び月の異名のすべてを集録して表さし參考に供してゐる。第三章は様式各説として前記の分類に基き、國內文書より國際文書に至

る迄節を別つ事十八、項を設くる事四十すべてに五百の頁を費して各項を更に細分し、各少きは二三多きは五、六の文書を引例して解説し、引用文書の總數は實に五百五十有餘の多きに及んでゐる、しかも本書の手引入門書としての企圖を全からしむる爲、徳重教授は補修に際して文書全部に亘つて返點、句讀點を附された、第四章は古文書の眞偽批判に關する諸注意及び最近の研究の結果を述ぶるもので數多の偽文書を引用して實際的な指導を試みてゐる。第五章は最後の章として解釋及び效力の研究を題し前者につきては、史徵墨寶考證より明智光秀の書狀に關する解釋を例として論を運び、後者につきては本質的效力實際的效力、時間的效力の三方面より研究を進めて以て本書の大尾たらしめてゐる。尙全卷を通じて、代表的な筆蹟及古文書の寫眞版七十有餘葉を挿入し且つすべてに解説を施して理解を全からしめ、更に引用文書目錄索引等を附して其完備を期したものである。引用文書、古文書寫眞版等の選擇につきては一議の餘地あらんも尙且古文書研究の手引たらしめんとする著者の企圖は見事に成就されてゐる、此の好個の著述を得て、これから國史研究に入らんとするもの、受くる利便は蓋し至大なるものがあらう。

本書刊行につきて示されたる著者の恩師、三浦、西田兩博士の師愛、同じく同窓の徳重教授の友情、更には書肆目黒四郎氏の義氣等すべては聞くもうるはしき近來の美談である。俊敏壽天くして逝ける著者又以て瞑すべきであらう。(菊版千頁、定價拾貳圓、東京京橋區南傳馬町目黒書店發兌(藤島))